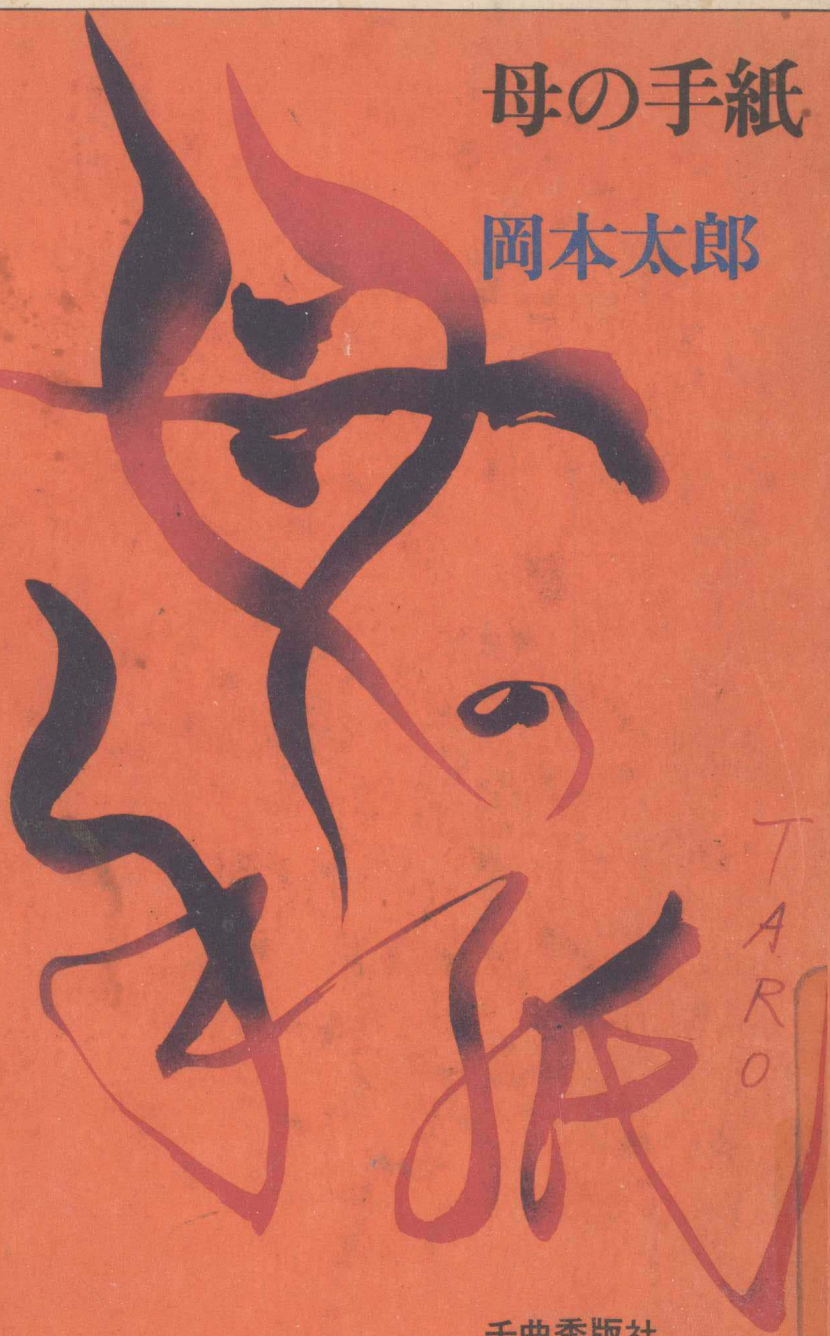


母の手紙

岡本太郎



T
A
R
O

千曲秀版社

家紙 TARO

岡本太郎

母の手紙

昭和五十四年三月十四日 初版印刷
昭和五十四年三月二十六日 初版発行

定価 一、三〇〇円

著者 岡本太郎

発行者 石坂重明

発行所 株式会社 千曲秀版社

〒174 東京都板橋区宮本町三〇一
電話 東京 九六五一・一四一一
振替 東京 八一・九六四三〇

印刷所 第一印刷 製本所 大口製本

検印廃止・乱丁・落丁本はお取換えいたしません

序

岡本一平、かの子、太郎の一家は、私になつかしい家族であるが、また日本では全くたぐい稀な家族であった。私は三人をひとりびとりとして尊敬した以上に、三人を一つの家族として尊敬した。この家族のありように私はしばしば感動し、時には讃仰さんぎょうした。

一平氏はかの子氏を聖観音とも見たが、そうするとこの一家は聖家族でもあろうか。あるいはそうであろうと私は思っている。家族というもの、夫婦親子という結びつきの生きようについて考える時、私はいつも必ず岡本一家を一つの手本として、一方に置く。

この三人は日本人の家族としてはまことに珍らしく、お互いを高く生かし合いながら、お互いが高く生きた。深く豊かに愛し敬い合って、三人がそれぞれ成長した。しかも三人がその家族の記録を書いた。かの子氏の「母子叙情」などの多くの小説がそれであり、一平氏の「かの子の記」がそれであり、また太郎氏にはこの「母の手紙」がある。この「母の手紙」のなかにも、また「父の手紙」があり、「息子の手紙」がある。（『母の死』父と子の書簡）母の死にあって、父と息子とのあいだに、このような美しい手紙の往復を見た例は多くあるまい。

日本では自分の家族を語るのに、つつしみとへりくだりをもってする習わしであるが、岡本一

家はその逆の型破りと見えるかもしれない。しかし真につつしみとへりくだりをもって対すべきは、自分に近い人、愛する人であって、世間の体裁や思惑にはなからう。岡本一家が家族を語っているのには、愛の誠実と謙虚とがあふれている。古い家族制度がこわれ、人々が家での生きやうに惑っている今日、岡本一家の記録は殊に尊い。この大肯定の泉は世を温めるであらう。

新聞社が現代洋画を代表する十五人の画家を選んで、展覧会を催し、その一人としての太郎氏の絵を十点近く、私も二三日前に見て来たが、かの子氏も一平氏もすでに亡く、この「母の手紙」が新しく太郎氏の絵に花開いているかと感じられた。一平氏晩年の南画風の絵は大成をしなかった。かの子氏の小説も円熟には至らなかった。太郎氏は出発点であらう。しかしこの「母の手紙」は、一家三人の芸術家の生成の記録でもある。

昭和二十五年一月

川 端 康 成

目次

序

川端康成

父母追想

五

滞欧中の手紙

七

東京から巴^{パリ}里への手紙

壺

「母の死」父と子の書簡

一七

付記

三三

母の思い出

三九

あとがき

四五

題字
岡本太郎
裝幀
秋山法子

父
母
追
想

昭和二十三年十月十一日、父一平は岐阜県の疎開先で急逝した。東京から駆けつけた私は父のなごやかな死顔をみた。まるでいつも昼寝をしているときの様子と同じで、ただ違っていたのは、枕頭に線香や花や供物が取返しをつかない不幸を証し立てるように並べてあることであつた。父は締切期日の迫つた原稿を書いて、非常に疲れた挙句熱い湯に入り、そのまま脳溢血で斃れたのである。平素至極健康だつた父の苦痛のあとのない死顔は、六十三歳という実際の歳より十以上も若々しかつた。

居並ぶ人々の手前、私はやっと耐えてしずかに合掌すると、紙と鉛筆を用意してもらつて死顔をスケッチした。何と柔らかな顔だろう。何気なく開かれた唇からはかすかな酈が洩れてくるような気さえする——ああ父よ——、余りにいたわしくて、私は何度となく筆をとめた。涙がほろり出る。

スケッチがおわると、私は亡骸を抱いた。そして父の額に手をあててみた。面貌は全く平常と變りないのに、肌はゾツとする程つめたく、身体は何かのつくり物のように硬直していた。父の死は無惨な実感となつて胸をしめつける。私は総身の温みで父をあたためた。

老いてからも様々の労苦が絶えなかつた父が、やつとどうやら生活の平和を楽しめるようになった途端に死んでしまった。生涯を通じて、報いられることのなかつた人知れぬ苦惱、厳しい精神生活を知っている私は、改めてその全貌を打ち眺めて慄然とするのである。

抱いているうちに、やがて父の身体に温みが出て来て頬に生色がただよい、鼓動さえ打ちはじめ

たようである——それがすべて幻覚であって、私自身の身体の温みであり、私自身の動悸が響いて
いるのだとは知りながらも、思わず父の顔をうち眺めるのであった。

急に私は狂ったようになった。

「おやじをこの儘ままにしておいてくれ、灰などにしないでくれ。」

抑えていた悲しみが堰を切って流れ出た。私は全く取り乱してしまった。人々は抱えるようにして私を隣室につれて行った。

やがて納棺になる。

「俺の凱旋の時はこいつを着て行くのだ」と目頭父が言っていた、母が生前不手際に縫って父に着せた浴衣、（父が絵を描き、母の字が染め付けられてあり、浴衣地として一般に売り出されていた。）その冥途めいどへの晴着を着ていた。

——そうだ、凱旋だ。——と思った。

いよいよ出棺の時になって、私は人々に言った。「おやじは立派に仕事を成し遂げて死んで行ったのです。おやじ自身、死ぬことをいつも凱旋だと言っていました。皆さん、こんなことは普通のことではないでしょうが、おやじにとってはこれは晴の出発ですから、岡本一平万歳を三唱して下さい。」

万歳がおわると、しばしの間声がなかった。皆泣いた。

火葬場は一里ほど離れた田圃の中にある。真夜中であつた。田舎のことゆゑ靈柩車の設備もなく、寝棺はリヤカーの上に乗せられ、生前父の世話になつた人達がそれに縄をつけて引き、先に立つた。他の一台にはいっぱいに薪が積んであつた。

総勢二十人足らずであつたらう。月光の下を、線路を越えたり畔道を通つたりして、無雑作にリヤカーの上に乗せられて、最後の場所にいま父は臨む。この余りにもわびしい野辺の送り——これが嘗ては、宰相の名は知らずともその名を知らぬ者はなかつたという程に一世を風靡した人の最後を飾る有様と思えようか。この片田舎で生涯を閉じてしまつた父が、かえすがえすも氣の毒でならなかつた。

しかし、このような寂しい土地で、このように縄で無造作に引っぱられて行く父は、やはり洒落者だと心に慰めた。「文学青年」と私に大書させてそれを壁にかけ、新たに筆を揮つて、まず一休禪師の伝記小説を手がけはじめ、既に雑誌に六回連載し、他に二篇ばかりものした。

「いよいよ来年は東京へ出て仕事をする。もう田舎の生活も充分だ」と言つていた父が、あれほど自分の仕事に細心で緻密な父が、その用意に、いつでも梱包出来るように木の箱を作らせ、それを本箱代りに使つていた父が、計画をも果さずにこの片田舎で斃れてしまつた。戦争まで東京以外の土地に馴染むことの出来なかつた、賑やか好きで、江戸っ子の父であつたが——。

父を呼び迎える準備をはじめていた私は、せめてもう一年でも、二年でも生かしておきたかつた、

とかえすがえす取返しのない悲しみに身を破られる思いであった。

ひろびろとした畑地の中に、月光を浴びた小さな火葬場が、寝棺と薪と遺族と、亡骸なきがらを焼く用意をした近所の人の一行を待っていた。

父の死は、昭和十四年二月に母が亡くなってから丁度十年目である。父母は、人も知るように仏教に帰依して深い信仰を持っていた。父は母の生前も死後も彼女を観世音菩薩に擬して、仏前でも常に「南無観世音かの子菩薩」と唱え、私に母のことを語るのに観音様と言っていた。最後まで、その信仰は不動であった。

父の霊はいま、あたかも青年一平が母を知りそめた頃、多摩川のほとりの実家に彼女を慕って行った当時のように、晴れやかな面持でかの子観世音の許に行って、久々の邂逅かいこうを喜びあっている事だろうと思う。私は仏教信者でもないし、迷信的なことは一切信じない男である。死後の霊などということは考えられない。しかし、真に信ずる者はそれによって生き得られる筈だ。無信仰の私も、父が久しく彼地で待っている母に直面するというイマージュを、美しい絵物語として思いうかべるのである。

相互の大きな信頼の中に生きた父母は世間一般には人眼も羨むうらや円満な生活を完うまことしたように伝えられている。私自身も、よい御両親をもたれて幸福ですね、としばしば言われる。成程それは一応

事実に違いない。しかし父と母のように全く異質の芸術家同志が共同の生活を営むことには、傍目には想像も出来ない絶望的な矛盾があり、それがいろいろの葛藤を描いたのである。

何という激しい精神生活の連続であつたらう、と今でも私はふり返つてそう思う。互いの理解が不足だった夫婦生活の暗黒時代から抜け出て、宗教的な信頼に生きぬいた後年の父母相互間の感情の消息は、母の歿した直後の父の追憶記に書き現されている。

「かの女が眠つてから四日間の間、もう何にも無い、というこの感じの苦しみには、他人迷惑だろうが、自分だけは一層、気が狂つて呉れたらさぞ楽だろうという思いが続いた。その次の日は怒り度くしてしうがなかった。その末、ふと、こりゃこんな消極的な態度では駄目だと思った。これほどかの女に訣れることがいやなら訣れなければいいじゃないか。また必ず逢うと思えばいいじゃないか。思うだけでなく屹度逢うに決まっていると気がついた。

これほど人の心に深き歎きをうち込み、深い結ばれを取付けた相手がこのまま断絶されるわけではない。何かの形でいつかどこかで逢うに決まっている。現にかの女の行衛を臆索してみるのに死んだとか消滅してしまつたとかいう感じはちつともしない。何か匂わしい不壊の存在の形を取り、その形式で眠つているとしか見出せない。そしてその眠りの状態は浮世の疲れを休めると同時に、またその中で修行しつつもいられるところである。」

(かの子の記)

母の死をこのように悼んだ父は、母によつて救われた父自身の魂の思い出をつぎのように語つて

いる。

「もと、僕は相当に臆病で小狡い男だった。まごころとか純真とかは嫌味で不便で痛い錐で揉み込まれるもののように思っていた。かの女と一住二十八年、この力の万物を震い上らせるほど怖ろしいものであることを知った。だが、かの女のそれは必ずしも生で出ているのではない。人間の、女の、持つ本能の長所短所共に通じてそれを流露させた。流露しない場合は、かの女は一種の電氣的な氣魄を身の髓から揺り出して人に移した。かの女の文章に電氣的なものがあるのを指摘した評者があったが、恐らくそれが文章に托されたものであるだろう。未だ学びが覚束なくて僕にはよく判らないが、このまごころを揺り出して人に移すその元の力、これを生命というのではないかしらん。

とまれ、そういう要素に対して無機物同様であった僕が、だんだん化せられて人性に敬虔なもののあるを知り、かの女の眠りという大きなショックに会うと、人前憚らずこの衷心の声をうち出して臆せないのは、また、かの女の力である。五十を過ぎたインテリの男がこの現代に、恋々として、近ける妻を偲び剩って二世の約束を信ずる。見よ、この愚かしき若々しさを。だが僕はこの考えの中心に坐するとき悲壯な生の勇氣が起って来る。こうして涙を流しつつも、従容と文字を選んで原稿紙の区画の中に当嵌めて行くことが出来る。見よ、この上に永遠に青春の女、かの子が眠中に働きつつあるを。かの女は何事にも眼の前の事より、余韻とか後の氣配いの方に意義の深いものを遺した女だ。」

（かの子の記）

この父の言葉に対して、私は何も付加えることはない。だがこのような精神的な結びつきが完成

するまでには、大きな試煉があつた。二人のまるで違った性格や生い立ちの相違が、深刻な相剋ともなつた。

京橋の南鞘町（現在、昭和通りになつてゐる。丁度京橋と八重洲通りの中間あたり）に育つた父は、内心憂愁と反逆の鬱々とした浪漫性をたたえ、何ものに対してもひけを取らないという、天を呑む気魄と野心を秘めながら、外面は酒脱飄逸、早熟の都会児であつた。年に似合わず大酒し、一ぱし遊蕩児然とした美青年の深刻な毒舌は、周囲のものを辟易させた。当時はやつた梅坊主に弟子入りして、カッポレや馬鹿ばやしを踊つて一生を送ることを理想と思つていたという。ニヒリステイックな性格をうかがうことが出来る。たえず光を求めながらそれを否定していた若い美校生は、やがて彼のいのちを救ふことの出来る、ただ一人の女性に邂逅したのである。それが母かの子であつた。

多摩河畔の伝統的な旧家の長女として育つた母は、南鞘町に嫁して来て、肌合のちがう下町の生活に馴染めなかつた。舅・姑や弟妹との間もうまく行かず、しばらくして青山に新居を構えて移つた。父は其の頃和田英作先生の下で藤田嗣治氏や田中良氏と共に、当時新築された帝劇の背景を描いて生活していたが、やがて朝日に入社して漫画を描くようになった。だが江戸っ子氣質の父は、収入の殆んど全部を世間態をつくらつたり友達づきあいで呑んでしまつたりして、生活の方は惨憺たるものであつた。ガランとした家の中で、電燈をとめられてしまつた真暗な夜におびえたことを、

私は今でも覚えてゐる。乳母かんざひ日傘で育つた母は、生れてはじめて経験するこの生活苦に呆然とした。所謂家政にうかつた母は周囲から輕蔑された。多感な母は冷たい現実じつじに傷つけられ、また若い詩人の情熱が家に出入りした青年との間に思わぬ葛藤を描いたりした。生活の不如意、情愛の縫もつひ、更にその上に大きな負荷として、いたずらざかりの私がまた手に負えない駄々っ子だったのである。当時の母は病身だった。弱い心身にこれらのすべてが絡んで来て、母は二進も三進も行かなくなつてしまつた。そして全くの孤独のうちに、自らのいのちを断とうとしたことも、再三ではなかつたのである。

或る日、父は半狂乱の母のうつろな瞳孔をみて、はっと胸をつかれた。内に内にと絶望的に自分のいのちをけずりつづけて行つた哀れな母を、これまで顧みもせずさへにいた過失に、今更のように愕然としたのである。父は母を傷けつけていた全てのものと訣別した。酒盃しよはいを手てにせずには仕事が出来なかつた程に好きであつた酒をやめ、煙草を断ち、肉親友人との関係も断切つて、ひたすらに親子三人の方舟はこぶねのような家を支えた。父母が連立つて宗教の門を叩いたのもその時分である。

宗教は二人にとって、越えなければならぬ高い峰々であつた。しだいに父と母の仕事は豊かな光りを加えて行つた。芸術的な立場の違いも、互いのいたわり、援助によつて、仕事を推進させ、円熟させて行つた。やがて世の羨望のうちに、昭和四年私達親子三人はヨーロッパにむけて旅立つた。